

「月を愛でる ー中秋の名月を巡ってー」

講師：渡部 潤一

プロフィール

肩書：大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 国立天文台 副台長、教授、
総合研究大学院大学数物科学研究科天文科学専攻教授

- 1960年 福島県会津若松市生まれ
- 1983年 東京大学理学部天文学科卒
- 1987年 東京大学東京天文台助手
- 1988年 東京大学にて学位取得（理学博士）
国立天文台・光学赤外線天文学研究系・助手
- 1992年 総合研究大学院大学・数物科学研究科助手併任
- 1994年 国立天文台広報普及室長を兼務（2003年まで）
- 1998年 国立天文台天文情報公開センター助教授
- 2005年 国立天文台天文情報センター広報室長
- 2006年 国立天文台天文情報センター長
- 2008年 同アーカイブ室長（兼務）
- 2010年 同 広報室長
- 2010年 同 教授
- 2012年 副台長（総務担当）

研究内容：

太陽系の中の小さな天体（彗星、小惑星、流星など）の観測的研究。

特に彗星を中心に太陽系構造の進化に迫る。天文学の広報普及活動にも尽力。1991年にはハワイ大学客員研究員として滞在、すばる望遠鏡建設推進の一翼を担った。国際天文学連合では、惑星定義委員として準惑星という新しいカテゴリーを誕生させ、冥王星をその座に据えた。

著書：

- 「大彗星、現る」（KK ベストセラーズ、共著）
- 「面白いほど宇宙がわかる15の言の葉」（小学館101新書）
- 「新しい太陽系」（新潮新書）
- 「ガリレオがひらいた宇宙のとびら」（旬報社）
- 「夜空からはじまる天文学入門」（化学同人）
- 「天体写真でひもとく宇宙のふしぎ」（ソフトバンククリエイティブ・サイエンスアイ新書）
- 「星の地図館」（小学館、共著）ほか多数。

月を愛でる — 中秋の名月を巡って —

渡部潤一（国立天文台）

要約

日本は星よりも月を愛でる文化を育ててきた国です。先人たちもゆったりと春の朧月を味わい、赤い月に夏を感じ、中秋の名月を愛で、そして天心に輝く冬の寒月を眺めてきました。そして、十六夜、立待月、寝待月、更待月など月の出を待つ名前をはじめ実に様々な呼び名を持ち、文学や信仰にまで広く浸透しています。中秋の名月を中心にした月の文化について紹介します。

I. 夜空に浮かぶ月

夜空に浮かぶ月は、人類が最初に注目した天体とあってよい。注目された第一の理由は、その明るさである。月は太陽をのぞけば夜空でもっとも明るい天体なのである。人工灯火のない時代には、闇を照らす照明としての役目もあった。第二の理由は、肉眼でもその大きさがわかる点にある。視直径は30分角、つまり1度の半分である。目のいい人が見分けられるみかけの大きさは1分角だから、月は、その30倍もある。そして第三の理由が、夜ごと、その位置を移動するとともに、姿・形を変えることだろう。太陽は自ら輝いているため、その形は円盤のまま変わらないが、月はどんどんその形が変わっていく。「月の満ち欠け」と呼ばれる現象である。そして、その満ち欠けは繰り返すという特徴を持っている。満ち欠けの周期は、平均して約二十九・五日である。

月の満ち欠けの繰り返しは、われわれが時間を刻む暦に利用する上で実に好都合だった。時計もカレンダーもない時代、規則的な動きとともに、誰が見てもわかる形の変化を示す月を、「時を刻む」目安にすることは自然な成り行きである。ということで、太陽が昇っては沈むというサイクル（＝一日）と、太陽が天球を一周する季節のサイクル（＝一年）との中間の時間単位、つまり暦の単位として、月の満ち欠けのサイクル＝「一月」ができたのである。日本語での「月」は、天体としての月を示すと同時に、暦の単位を示す漢字でもある。英語では前者が Moon、後者が Month

となっていて、一見違った単語に見えるが、もとは同じである。満ち欠けを繰り返す周期性を持つ天体としての「月」が、暦の「月」を生んだ。

II. 暦としての月

こうして、月に準拠する暦、太陰暦が編み出された。太陰暦では、日付が月の満ち欠けと一致することになる。月が太陽とほぼ重なって見えなくなる日を一日として、月の始まりとする。一日は「ついたち」と読むが、これは「つきが立つ」という意味を含んでいる。また、これから新しく月が生まれるので、一日の見えない月を「新月」とも呼ぶ。三日目に見える夕空の細い月は、三日目の月なので「三日月」。七日前後には、半月となるが、弓を張った弦に見たてて弦月とも呼ぶ。月の上旬に現れるので、上旬の弦月＝上弦である。ちなみに、弦を上にして沈むために上弦と呼ぶと思いきこんでいる人が多いが、これは間違いである。月の半ば、十五日頃には満月となる。満月を十五夜お月様と呼ぶのも、このためである。細くなって二十一日から二十二日頃に現れる弦月が、下旬の弦月＝下弦である。そして、東の地平線に月が近づき、ほとんど見えなくなる暦上の月の最後の日を晦と呼ぶ。これは「つきがこもる」という意味である。たまたま満ち欠けの周期が、偶然にも約二十九・五日であるため、日数が二十九日の月と、三十日の月とを交互に繰り返すことによって、満ち欠けと日付とをほぼ一致させ続けることができる。これが大の月、小の月の起源である。

ところが、月を基準とした太陰暦だけでは、い

ささか不便なことが起こる。それは季節の周期と、「年」との関係である。年は、地球が太陽の周りを回る公転周期であり、月の公転周期とは、両者の間に何の関係もない。そのため、月を十二回繰り返して、一年にしようとする、その日数は三五四日にしかならない。したがって、太陰暦のままでは一年ごとに季節が約十一日ずつずれてしまう。これでは、季節を示す暦としては、機能しなくなる。さて、ここからが世界各地で扱い方が違っていった。ほとんど季節がないような砂漠地方では、それでも構わず、むしろ誰にもわかる月の形を基準とした方が何かと便利である。そのため、砂漠地方で発達したイスラム文化では、純粋な太陰暦をそのまま使い続け、いわゆるイスラム暦(ヒジュラ暦)となって現在に至っている。しかし、季節変化が大きく、農耕を中心とした地域では、季節変化と無関係な暦のままでは不便である。そこで、月を基準としつつも、太陽の動き、すなわち季節がずれないように配慮する補正を施す暦として、太陰太陽暦が生み出された。ごく簡単に言えば、適当な間隔で「閏月」を入れることで、ずれを補正するものである。ずれがたまってきたら、例えば八月の後に「閏八月」を挿入し、その年は一年十三か月とした。この閏月の入れ方は複雑だが、基本的には、十九年に七回入れることになっている。

ちなみに、もともとの閏年とは、この閏月が挿入され、一年十三か月の年のことを呼んでいた。ところで、日本では、長らく中国から輸入した太陰太陽暦を採用していたが、明治五年の改暦によって、月とは全く無関係な太陽暦を採用した。これによって、日付は月とは無関係になってしまったのである。

III. 月に祈る

ちなみに、中秋の名月は旧暦八月十五日の、ほぼ満月である月を指す。2013年は9月19日だったが、中秋にはお月見をするように、日本人はどちらかという月に親しんできた民族と言えるだろう。欧米では、狼男に代表されるように、月の光にいいイメージはない。英語で *lunatic* と言えば気がふれているという意味である。一方、日本では「竹取物語」にあるように超人の住む理想

の世界として、あるいは信仰や風流の対象とすることの方が多かった。中秋の名月のお月見は、もともとは中国が発祥地である。平安貴族は、観月の宴として十五夜の時には雅楽の演奏や舞を催すなど、お月見は次第にイベント化し、民間にも広まっていった。日本でのお供えものは、ススキの穂にお団子といった組み合わせが全国的に多いが、中国では月餅を供え、サトイモを食べる。その意味では収穫祭的な側面が強く、実際、お団子は必ず新米を使うという地方もある。中秋の名月は、お供えものを頂けるということもあって、子どもたちにはかなり楽しみになっていたのではないだろうか。

ところで、中秋から約一か月後の満月少し前、旧暦九月十三日に行われる「十三夜」のお月見という行事がある。この十三夜の発祥には諸説あるが、少なくとも私の知る限りは他の国には見あたらない。収穫物の季節から、十三夜のほうは粟名月あるいは後の月といい、中秋の名月の方は対比して芋名月ともいう。

同じお月見行事でも、現代になって完全に廃れた「月待ち」行事と呼ばれるものもあった。もともとは満月を過ぎて、かなり深夜に東から昇ってくる月の出を眺め、その祭神に祈るという民間信仰であった。とくに二十三夜、二十六夜などが人気があり、東京・多摩地区でも、あちこちに「二十三夜塔」が残っている。山梨県の旧・秋山村(現上野原市)や都留市には二十六夜山という山があり、このあたりでも月待ち信仰が盛んだったことをうかがわせる。とくに、二十六夜では、月の出の時に阿弥陀仏・観音・勢至の三尊が姿を現すとされた。細身の月なので、地平線が水平ならば、月の出の際、まず両先端が現れ、つづいて本体が姿を見せる。これを三光と称して、弥陀三尊と見ていたのか、月の中の模様(太陽の光が当たっていない部分の模様が、地球からの照り返しを受けてほのかに光って見える地球照と呼ばれる現象)に三尊が見えたのか、定かではない。江戸時代は、この月待ち行事が、道教に由来する「庚申待ち」(庚申の夜に三尸(腹の中に棲むという三匹の虫)が人体をぬけ出し、人の罪過を天帝に告げるのを、徹夜して阻止しようとするもの)と一緒に、月の出を寝ないで待つようになった。次第に宗教色が薄れ、その晩は月の出までオールナイトで飲めや歌えの宴会の夜となっていく。高輪・

品川などの海辺で宴を催す江戸の人の姿が、浮世絵などに残されている。宴会色が強くなった月待ちは、当時の文化人からは忌み嫌われていたが、楽しみの少ない当時の人々の息抜きだったのかもしれない。

日本には月の別名が多い。もちろん、欧米でも地平線に近い赤色の月をストロベリー・ムーンと呼んだりするが、月齢ごとに別名があるのは日本とポリネシアくらいであろう。たとえば、十五夜への期待をふくらませる、前夜の月を「小望月」、悪天候で十五夜が見えないときでさえ、「雨月」とか「無月」と呼ぶ。見えなくても名前を付けるところはすごい。また、十五夜の翌日の十六夜は「いざよい」と読む。いざよう、というのは古語でためらうという意味である。月齢が進めば進むほど、月の出は遅くなるので、十六夜の月は十五夜に比べて、小一時間ほど遅く昇ってくる。その遅い月の出の様子が、月を待っている貴族たちには、まるでためらいながら昇ってくるように思えたのだらう。さらに翌日の十七夜の月を立待月、十八夜は居待月、十九夜は寝待月、あるいは臥待月とも言う。それぞれ、月の出を待つ貴族たちの様子を表したもので、十七夜くらいなら、立っ立っでも待ってられるが、十八夜だと月見台に座って、十九夜だと寝ころんで待っていたのであろう。ちなみに、二十夜を更待月と呼ぶ。夜が更けるのを待って上がる月という意味である。それにしても、昔の人が、いかにお月見が好きで、月の出を待ちこがれていたかがわかる名前である。これ以外にも、田毎の月とか、朧月とか、寒月とか、水月、湖月など、枚挙にいとまがない。最近でも、伊集院静さんの直木賞受賞作である『受け月』や、闇歩きガイドと名乗る作家の中野純さんが都会のビルの隙間から見える様子を命名した「隙間月」など、新しい名前も生み出され続けている。また、月に関することわざや商品、お酒も多く、月を詠んだ短歌や俳句も少なくない。日本人はいかに月を愛でてきたかという証拠なのであろう。読者の皆さんも、たまには古来、先人たちが眺めてきた月を、じっくりと見上げてみてはいかがだろうか。

面白いほど宇宙がわかる 15の言の葉



参考文献

- 「夜空からはじまる天文学入門」(化学同人)
- 「ガリレオがひらいた宇宙のとびら」(旬報社)
- 「天体写真でひもとく宇宙のふしぎ」
(ソフトバンククリエイティブ)
- 「面白いほど宇宙がわかる15の言の葉」
(小学館 101 新書)
- 「大彗星、現る」(KK ベストセラーズ)

